

はじめに

忘れられない言葉がある。

15年ほど前、東京・市谷いちがやのカフェで、ある編集者と向き合っていた。私は当時、共同通信社の記者になって12、13年目。入社以前から、本を書くことを夢見ていた。「これまでに取材してきたテーマをまとめたら、本にならないだろうか」。以前から知り合いだった彼に、相談に乗ってもらおうとしたのだ。

彼が勤める出版社はあまり大きくはなかったが、えり好みできる立場にはない。彼は私のお話を熱心に聞いてくれた上で、しばらく考えさせてほしいと言った。そしてコーヒーカーップを口に運びながら、こんな問いを投げかけてきた。

「これまでに雑誌とか、勤務先の『外』で何か書いたことがありますか？」

「ないです」。私が即答すると、うーんと言ってからやや小声で、「難しいかも、ですね」

と続けた。

納得がいかなかった。確かに、それまで本を書いたことも雑誌に寄稿したこともなかったが、誰だって最初は未経験者だ。それに記者として10年以上、毎日記事を書いてきた。文章力にはそれなりに自信もある。私が表情を曇らせたことに気付いたのだろう、すぐに彼は口を開き、こう言った。

「新聞記者って、文章うまくない人が多いんですよ」

言葉がすぐには頭に入ってこなかった。そんなことを言われるとは思っていなかったからだ。繰り返しになるが、記者は文章を毎日書いている。しかも、散漫にならず、要点を簡潔に、コンパクトに、無駄なく書くよう教育されている。

特に、私が勤める共同通信社では書き方が徹底されている。重要なポイントをできるだけ記事の前に置き、配信を受けた新聞社が記事を途中で切って紙面に掲載しても、意味が通じるようにしている。これは「逆三角形スタイル」と呼ばれ、読者へ効率的に情報を届けるには、最も優れた技法とされてきた。記者を10年もやっていれば、たちどころに逆三角形の記事を書くことができる。

それだけに、彼の言葉は心外だった。

結局、本を書きたいという私の申し出は、その後うやむやになった。幸いにも数年後、別の出版社から本を出すことはできたが、それでも、彼があの時言った「記者は文章がうまくない」は、モヤモヤした疑問となって私の頭の中にずっと残っていた。

しかし、今となってはあの言葉の真意が分かる。しかも納得もできる。記者は一般的に文章が下手だ。もちろん、中には文章が上手で著作が多い人もいるが、そうした記者は、全体から見れば少数派だと思う。

そう思えるようになったきっかけは、デジタル向けに記事を出す部署「デジタルコンテンツ部」が社内到新設され、初代の部員として配属された2021年のこと。

この部署では、1500字〜4000字程度の長文記事を出している。配信先は加盟新聞社のほか、Yahoo!ニュースなどのプラットフォームもある。基本的に共同通信を名乗らず、「47NEWS」という名称で公表されている。書き手は共同通信の記者たち。私はデスク（記者の原稿を手直しする立場）として原稿を推敲すいこうしたり、その内容や書き方を提案したりしているのだが、最初に送られてくる原稿の大半が、実に読みにくかった。

その理由は、誤解を恐れずに言い切れれば書き方が「新聞記事」だから。文章が1500字を超えると、逆三角形スタイルは途端に読みにくくなる。記事の要点が文章の最初のほうにぎゅっと凝縮されており、窮屈な印象が拭えない。このままインターネットに配信しても、読者はすぐに嫌になり、冒頭部分で離脱してしまうだろう。

編集者の彼が言いたかったのはこれだな、と腑ふに落ちた。一口に文章と言っても、限られた紙幅にできるだけ多くの情報を詰め込む新聞と、字数制限がほばないデジタルの世界では、書き方はまったく異なる。デジタルでの書き方は、どちらかと言えば雑誌のようなスタイルに近いのではないかと考えた。

そこからは試行錯誤の連続だった。どうすればより多くの人に読んでもらえるのか模索した。どういう書き方の文章が実際によく読まれるのか、プラットフォーム上に並ぶ無数の記事から私が何気なく選ぶ時、その見出しのどこに惹ひかれたのか、そしてデスクとして担当した原稿に何が足りないのかを、掘り下げて考えることが日課になった。

それを続けているうちに、平均的なページビュー（PV）が上がり、いわゆる「バズる」記事も高確率で出るようになった。

本書では、そうやって身につけた書き方のエッセンスを紹介する。私の職業的なバックボーンからお分かりのように、対象はノンフィクションであって、当然、小説の書き方については分からない。ただ、報道目的の文章だけでなく、プレゼン用や私的な内容をブログなどに書く際にも当てはまるものと考えている。

まず、新聞での書き方とデジタルでの書き方を比較し、両者がいかに違うのか、新聞記事という「特殊な世界」を紹介したい。次にデジタル記事が試行錯誤の末、最終的にどういう形態になっていったかを、実際の記事を例に挙げながら解説し、なぜデジタル記事ではスタイルを変える必要があるのかを、「読者の変化」との関わりから説明する。最後に、オールドメディアの代表格である新聞がデジタルの世界でどうなっていくのか、生き抜くためにどうすべきなのか、そもそも生き抜けるのか、それぞれの可能性について、デジタルを担当したことで考えるようになった視点から詳述しようと考えている。

「文章の書き方」的な本を私が書くのは、偉そうでおこがましいことと思う。正直に言って、私はもともと文章がうまいわけでもなく、どちらかと言うと不器用な記者だった。それでも、文才がなくてもバズらせることができるという点から、そのための試行錯誤や工

夫を伝える意味はあるのではないかとも思う。

最後に言い訳になるが、バズらせられるかどうかは、いまだに試行錯誤の過程にあり、本書の内容が「正解」ということではもちろんないことをお断りしておきたい。